

第 25 回 京都御苑ずきの御近所さん

日本山岳会（京都・滋賀支部）顧問
京都自然観察学習会

塚本 珪一 様



今西錦司氏から学ばれたという
「自然学」など、自然に対する思い
を教えてください。

今西先生は、もとは京都大学で昆虫の研究をされていましたが、その後、人類学者になりました。はじめは昆虫学において、鴨川のカゲロウの「棲み分け」、分かりやすく言うとAとBとCというカゲロウが川の中でこういう風に棲み分けているという研究がされています。棲み分けの理論を発表されたのは、今西先生が一番はじめだと思います。

私は、先生と日本山岳会で一緒になりました。先生は普通の学者ではなく、どちらかという突拍子もないことを話されるため、影響力が大きかった訳です。例えば、『生物の世界』という本では「この世の中は寄り合い所帯であって、いろんな生き物が何らかの関係でむすばれている」ということを書かれています。画家の堀文子さんは、いろんな動植物が共存する『ユートピア』という絵を描かれています。これが今西先生の話とよく似ているので、面白いと思います。ユートピアという絵を見ると、今西先生の「ヒトは自然の一員」という言葉が表す美しさ、即ち先生がどのような環境を理想的なものとしてイメージされているのかを確認できます。先生

は、1983年『季刊人類学』という本の中で「自然学の提唱」という一文を書いておられますが、その中で非常に面白かったのは、この世にはいろいろな生物の「種（Species）」がありますが、その次の段階として「種社会」という概念をつくられたことです。先生は非常に「社会」がお好きで、「人間の社会だけではなく、生物世界にも社会がある。種社会とは、それ自身が主体性を持つ認識可能な実存物でspeciaともいえる。「種社会」がまた寄り集まって生物全体社会があるのだ」ということを提唱されました。先生は1902年生まれなので、かなりのお歳のときです。他にもすごいと思うことは、先生が80歳のとき、『生態学と自然学のあいだ』という文を書かれましたが、その中で「自然を客観的に扱うのではなく、自己のうちに自然の見方を確立することでなければならない」と書かれています。「自然はこうだ」と先生から教わるのではなく、やはり我々自身が自然とは何かを考えるべきだということです。このように、先生は自然の見方を示された訳で、私も自己の内に自然の見方を確立してきました。そういったことがあり、今西先生の影響は大きい訳です。

先生が「フンころがし」に強い興味を惹かれた理由を教えてください。

私がフンころがしに興味を持ったのは、小学校2年生のときに親父が岩波文庫のファーブル昆虫記を買ってくれたことがきっかけです。ファーブル昆虫記をパッと開けると、フン玉を転がしているフンころがしの写真が出てきます。それに興味を持ち、最初はその部分から読み始めました。当時は全部ではなく、そのフンころがしの部分だけをずーっと読んでいて、これは面白いと思いました。それから、いろいろな場所を歩いていても、フンころがしを絶えず見ていたので、親しみがどんどん湧きました。

私は、今の京都府立大学が農林専門学校だったときの学生で、昆虫教室に徳永先生という偉い方がおられました。先生が私に与えた卒業論文のテーマは、変わっていました。モミジの幹に「スズメの小便田子(しょうべんたご)」と呼ばれる丸っこいものが付いているのを見かけます。実はこれはイラガの繭なのですが、これにハチが寄生することがあります。普通はある時期になると、丸っこい繭の上側の蓋がポコッと開いてイラガの成虫が出てきます。私のテーマはその出てくるイラガではなくて、セイボウという青いハチでした。セイボウはイラガの繭の一部を噛み砕いて小さい穴を開け、そこにおしりの針を刺して産卵し、繭の補修をします。その研究をなさいと言われました。始めは何をやれば良いのか分からなかったのですが、セイボウは南の方から段々と北上してくるので、近畿地方の分布を考察しろと言われたのです。あまり興味はありませんでしたが、レポートをまとめて卒業しました。その傍らですが、フンころがしの採集を続けました。その頃、京

都府立農林専門学校は西京大学に変更されました。卒業後、西京大学農学部の研究員に入れてもらい、本格的にフンころがしの研究を始めました。

19歳から平安高校で生物教師として働き始めました。どうして19歳で先生になれるのか不思議に思われるかもしれませんが、当時は専門学校を出たら、すぐに高等学校と中学校の教員免許をもらえました。理科の免許です。平安高校の生物の先生の中に丹(タン)先生という本当に野外派のすごい方がいらっしゃいました。私が教員になってすぐに、生物クラブの活動の一環として、若狭湾にある冠(かんむり)島というオオミズナギドリが繁殖していることで有名な島に行きました。冠島は、面白いフンころがしや昆虫類がいるすごい場所でした。翌年以降は日本の島、例えば利尻島や礼文島などあちこち訪れました。利尻島には非常に面白いフンころがしがいました。それも、利尻で一番高い利尻岳の頂上にです。10人ほどのメンバーでキャンプをしながら、調査をしました。私が19歳で教員になったとき、生物クラブにはちゃんと顧問の先生がおいでだったので、私はバドミントンクラブの顧問をやらされました。当時は平安高校以外にバドミントンの強い学校が無く、京都府内の大会では優勝できました。全国大会に参加するため東北地方などいろいろな場所について行くことができ、面白かったです。最高学年の子だと、私とあまり歳が変わらなかったのに、何でも「先生、どうぞ」と言ってもものすごく大事にしてくれました。高校教諭の終わりの頃はバドミントンの審判員の資格も持っていました。今は「やれ」と言われても、もう出来ません。

フンころがしに対する興味は次第に高じ、中国領のパミールに行ったときには、標高

3,600m くらいの場所でみんなで座って紙コップでお茶を飲んでいたら、コチンと数ミリ程度の小さな虫が入ってきました。そのマグソコガネの研究をするなど、面白かったです。

調査研究や登山隊への参加など、 様々なご経験の中で、印象に残っている 出来事を教えてください。

登山は純粹に山に登るためで、フンころがしの調査はついでに行いました。一番最初に行った山は、京都の山岳連盟で海外隊として行ったカラコルム山脈のディランという山です。国境問題の関係で、パキスタン政府に登山する山を指定されました。まずは 1963 年に京都府大の学生を連れて偵察に行きました。本隊は 1965 年です。面白かったのはどくどくマンボウシリーズの著者である小説家の北杜夫さんが、その時のドクターでした。小説と同様、ご本人は精神科医なので、我々隊員は「おい。このドクター、精神科や。これは大きな病氣出来ひんで！」と言っていました。ですが、実際は違ったのです。ドクターには船医の経験があり、船医だと分かる。「これはやばい！どこを切られるか分からない！」と会話の中身が変わりました。船医というのは、どこでも何でも治療する訳ですが、外科的処置に積極的なので「これは恐ろしいことになった」とみな恐れました。その変り様が、面白かったのです。ドクターは我々の登山隊の記録をもとに『白きたおやかな峰』という本を書いています。書物にまとめる際にだいぶ手伝いました。どういう風に手伝ったのかというと、私のところに「次の言葉を京都弁に訳せよ」と手紙が来るのです。我々は京都の登山隊なので、山でも会話は京都弁でした。会話の内容が大体は分かっ

ても、細部がよく分からなかったようです。また、ドクターはかなりレベルの高い昆虫採集もやっていて、いろいろな本も書いています。なので、私ともものすごく話が合いました。ドクターは関東の昆虫、私は関西の昆虫。ドクターと話していると、いつも隊長さんに「また虫ですか」と言われました。それくらい面白かったのです。その時はちょっと時間切れで、どうしても頂上までは行けませんでした。どこかの隊は登頂しています。

それから、世界で一番高い山はエベレストですが、二番目は K 2 という山です。他にも名前がありますが、この大きい山脈で測量地点に名称がついているのは、K 2 だけです。何故そうなったかという話は長くなるのでここでは言いませんが、この K 2 に学術隊として行けと言われ、学術隊長として参加しました。学術隊ですから、チョウを追いかけたり、昆虫を採ったり、植物の写真を撮ったりして、それも面白かったです。後は、いよいよカラコルムを止めて、中国領のパミールの山々へ行こうということになりました。高等学校や中学校で使う地図を見ると、中国領の一番端にコングールという山があります。標高は 7,700m くらいです。そこに焦点をあてて何年もやっていたのですが、1980 年に頂上へ向かって行った 3 人の隊員が、結局帰ってきませんでした。遭難してしまったのです。最後はどういう風になったのか分かりませんし、もちろん死体も出てきていません。回収も出来ないような場所なのです。総隊長の小谷さんは、当時京都商工会の会長でしたが、帰国時に一瞬にして髪の毛が真っ白になって、大変でした。3 人の隊員の最期がどういったものなのか分からない、と皆が悩みました。1989 年、ちょうど天安門事件が起こった頃、高校教諭を辞めてコングール登山に行

ったときに、ようやく9名全員が登れました。私はその頃すでにいい歳でしたので、ずーっとベースキャンプで気象観測をやっていて、アタックはしていません。このような点で、登山では非常にいろいろな勉強ができ、すごかった訳です。

私の戦争経験といえば、B29がずーっと京都の上空を通過していたことです。行き先は大阪でした。私の家内は福井県出身ですが、話を聞くと、実際に焼夷弾が落ちてきて、街は焼け野原となりました。京都でもどこか数ヶ所には落ちていたようです。しかし、我々の耳には入ってきませんでした。広島に原爆が落とされたときは、新型爆弾が落ちて大変なことになっている、ということまで分かりました。しかし、長崎に落ちたことは我々の耳に入ってきませんでした。そういう時代でした。沖縄戦のことも全く耳に入ってきませんでした。その時に聞いていたら、非常に恐ろしい思いをしたと思います。

先生は、京都御苑の多様な自然を「曼荼羅」に見立てていらっしゃる。長年、京都御苑で観察を続けてこられた中で、感じられたことや変化などを教えてください。

私が京都御苑の環境や他の環境について、「曼荼羅」に見立てるときは、いかにして発想、視点を変えるかを考えています。ヒントはアオバズクの食痕と、今西先生などいろいろな先輩の環境に対する発想です。例えば、クロード・レヴィ・ストロースという方は、日本へ来て、里山風景を「自然のもつ自発性を生かしながら、最適の環境をつくり出そうという努力」と言っています。そして、「里

山というものは、人間が自然を壊さずに上手くつくったもので、非常に美しい風景である」と言っています。面白い人だと思います。里山はカブトムシやクワガタムシなどが多く棲む場所ですから、考えてみれば御苑と一緒にです。

次に、梅原猛さん。非常に立派な方で、環境論に関し『共生と循環の哲学』という本のなかで、哲学の観点から人間の共生と循環というシステムがちゃんとあるんだ、ということを書かれています。仏教の話で、少し読んだだけでは分かりませんが、そこには「動的平衡」という考えがありました。動的平衡はもともと京都大学昆虫学教室の内田先生が言い始めた言葉です。この人の昆虫学は、高等数学で行列やらを使うので難しくて全然ついていけません。それが嫌で農学部へ行った人がたくさんいます。内田先生の言う動的平衡は非常に面白いものです。今、動的平衡を言う人はもう1人、青山学院大学教授の福岡伸一教授がいます。あの方は非常に面白い方で、体に良いとされる薬などいっぱいありますが、例えばコラーゲンが肌によいとマスコミなどで言われていることに対して批判的なことを言っています。この人がどうして動的平衡を言い出したのかというと、要するに、生物のつくる環境というものはアメーバの足があっちから出たりこっちから出たりするようなもので、常に動いているということなのです。それで面白いなあとって大いに参考にしています。しかし、今の高等教育ではおそらくアメーバのような面白い動きをする生物のことは教えません。食料になっているミドリムシのなかまも、おそらく今の人には見たことがないと思います。我々は実験室のフラスコの中で、そういったものを飼ったり調べたりして、それを子どもに見せてい

ました。みんな喜んでいました。

カラコルムのK2では、14時頃になるとサンドストーム(砂嵐)がぶわーっとやってきました。我々は、カメラなど大事な物を全部ビニールに包んだ上で、テントに入れていました。その時、劇場映画をつくる班も同行していましたが、その方々はどれだけ包んでも駄目だと話していました。どこからか、ものすごく細かい砂が入ってくるそうです。ちょうど砂嵐が通過するときに撮ったフィルムには、やはり砂の傷が入っていました。どうやら、砂嵐はK2の標高5,000m辺りまで巻き上がっているようでした。その風によってサクラソウの断片なんかも運ばれていたようです。5,000m地点のキャンプから「塚本先生、こんなんあったで」と隊員がサクラソウを持って下りてきました。ちょうどキャンプの5,000mの辺りにはお花畑がありましたが、それも同じことだと思います。環境を論ずるとき、特に日本には偏西風や台風などいろいろな風があるので、どこに何が運ばれるか分かりません。

御苑にはいろいろな献木もあります。何でもこんな場所にこんな植物が生えているのかと思うものがありますが、誰かが勝手に植えたものです。トンボ池で繁茂しているキショウブも明治33年頃に日本に入ってきた外来生物です。我々の大先輩には、南方熊楠という方がいます。今年で生誕150年です。あの方は本当に面白くて、環境というものを上手いこと言っています。明治の終わり頃、西洋ではエコロジーという概念が使われているらしい、という話もきちんと熊楠の全集に出てきます。「我が国特有の天然風景は我が国の曼荼羅ならん」と示した南方曼荼羅には一見曖昧性がありますが、命の関わりあう様相を説明するのに適していると思います。一度、

熊楠の記念館に行ったときには、ぐじゃぐじゃって書いて「曼荼羅」という訳の分からないものもありました。福岡さんが動的平衡と言うのと同じように、1つの環境の表現なのでしょう。

割合具体的なものとして、鞍馬寺の本堂に珠玉の網があります。その中の一玉に触ると、みんな一緒に揺れるのです。そのようなものを羅網の世界、もしくは曼荼羅と言うのだと思います。熊楠はイギリスに留学しているので、今とは勉強の仕方が違い、変わっていると思います。粘菌類の論文なども全部英文で書いている、すごい方です。

東京芸術大学の創設に深くかかわり、開校まもなく同校の校長となった岡倉天心の考えも良いと思います。『The Book Of Tee “茶の本”』という本の中で、鳥は花を語る。原始時代の人は恋人に花を、死者に花を供えている、と書いています。いつの時代にどんな人がどんな花束を添えたのかということは花粉分析から分かるそうです。また、天心は「1本の枝を切ったら指を1本切るんですよ」と言っています。これを紹介している須磨寺に行きましたが、サクラかウメが植えてあるのかなと思いきや、それはありませんでした。須磨寺の宝物殿には、弁慶が誰かが書いた「一枝伐らば一指切らん」という書があります。天心は花やお茶に関しても、面白い表現をしています。茶室では花を一輪挿しますが、宗匠はその花をポイッとゴミ箱へ入れることなく最後には葬るそうです。そして、花を妨げるようなものは一切茶室に持ち込まないそうです。茶道らしいと思います。

また、2006年頃に出版されたD・E・ALLENの『ナチュラリストの誕生』(訳:阿部治)という本で「知的風土」という言葉に出会いました。その中には、「初心者が立派

な成果を得るために、第一に不可欠なのは、適切な知的風土にある」とありました。原著では「The cultural (spiritual) climate」です。やはり、ヒトには文化的・精神的風土が必要だと思います。経済が尊重される今、一般社会にはこの知的風土は消失し始めているように思いますが、御苑にはこの知的風土という環境があると思います。繁栄しているかのように思える日本の社会には、一日三食を食べられない子どもたちが存在しますから、「知」以前の問題です。私は御苑での思考の日々を持つことによって、自分なりに環境論、自然学を考えていて、「知の風土」の存在を信じています。

京都御苑の環境構造は「社寺林モデル」で、宗像神社の森は「生きものたち・宗像神社、すなわち神・クスノキなどの森・古木・朽木・きのこ・昆虫・」だと考えています。「」はヒトの介入と時間です。構造は「曼荼羅」であり、加えてアメーバの仮足のようによくの回廊とつながっていると思います。これは「アオバズクモデル」とも言えます。南方から飛来するアオバズクとその食痕研究によって得られた13年間のデータから、生態回廊、空中回廊の巨大さを知りました。この御苑の森の構造を大切にしたいと思っています。

京都御苑の周りの土塁は割と新しく、明治時代に造られたものです。あの区画は、ヒトが「ここは御苑です」と示すために造ったもので、環境には全く関係ありません。アオバズクも土塁を通り越して入ってきますし、いろいろなものが砂塵と一緒に入ってきます。「環境」というと、ある区画があって「この環境は…」という言い方をすることがありますが、それには反対で、ヒトの考える区画的環境については再考が必要だと思います。

京都御苑というのは仕切られた範囲ではなく、外界と非常に通じていて、あたかも呼吸をしているように刻々と変化をしています。

京都自然観察学習会へのご参加など、現在の活動内容について、教えてください。

今、私は西台律子先生と宗像神社でアオバズクの食べ残しの調査をしています。ここには生き物がいて、神社(神様)がいっぱいいます。科学では神という存在は嫌がられますが、今西先生は八百万神を大事にしなければいけない、ときちんと言っています。やはり賢いと思います。私たちもそれに倣っています。もしも神社がなければ、アオバズクの営巣木は今頃伐採されていると思います。同じような例ですが、屋久島の山頂には祠があり、水の神様が祀ってあります。昔の人は非常に世界観がしっかりしているというか、視野が広くて、そういう点でものすごく優れた生き様であったと思います。ついこの間もテレビでやっていましたが、イノシシを獲ったときには心臓をすぐに神に捧げるとか、そういうことです。

来週、宮古島に行ってきます。宮古島には南に渡っていくサシバが集合します。日本全国から水の道のようなものを通り、宮古島に集まるのではないかと思います。宮古島のある場所でものすごい数のサシバが集合し、上昇気流を利用した鷹柱ができ、下降しながら一夜のねぐらを探し、次の日には南に渡って行きます。御苑にたくさんの野鳥がやってくるということも、そういう何かの道があるのでしょうか、アオバズクのように南から渡って来る野鳥もいます。宮古島は野鳥が集合する、いわゆるエアポートのようなものだと思います。

いますが、御苑も立派な野鳥のエアポートだと思います。もちろん、宮古島にはサシバを目的に行きますが、他の理由としては最も標高が高いところでも82mと低いこと、また、ハブがないことです。ただし、ハブはいないとある人に話したところ、「1900年代に一度発見されていますよ」とメールが届きました。ハブは怖いのです。私が屋久島へ行ったときには、まだ縄文杉が発見されていませんでした。営林署の署長が「航空写真を見ると、ここにこんな木があるんですよ。あるんだけど、下から行ったら見えません」と。その数年後に発見されました。屋久島は良いところです。私の師匠である鹿児島大学の中根先生が屋久島でフンころがしを記録されたのですが、その後、10年間ずーっと雄が見つかりませんでした。私が3度目に屋久島に行ったときに発見しました。犬の糞を仕入れて、それをトラップとして置いたのです。それがきちんと目録に記載されて、みんな喜んでいました。発見した場所は、モッチョム岳の割合集落に近い下の方です。山麓から出発して登り始める頃はみんな足早に歩くので、見落としてしまうのだと思います。山から下りて山麓まで帰ってくると、またさーっと早足で温泉に行ったりする訳です。トビウオのフライを食べながら、考えていました。あれは美味しかったです。

思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

私は京都御苑に隣接する場所で生まれましたが、幼少の頃の5年程は親父の仕事の都合で阪神電車沿線に住んでいました。小学2年生の時に御苑の裏にある滋野小学校に戻って来て、卒業しました。滋野小学校は京都

府庁の前にありましたが、後に滋野中学校になって、その次に何かになり、もう閉校してしまいました。校歌は「比叡山から下りてくる風が私たちの校庭に吹いてくるんだ」というものでした。その間に御苑を入れていて「御苑を吹きて、我が庭へ」というような歌なのです。

小学2年生の頃から、御苑はずっと遊び場所でした。小学校ごとに縄張りが決まっています、何々小学校はこの辺、というように誰が決めた訳ではありませんが、流動性がありました。要するに、そのときの子供たちの勢力によって決まっていたのです。我々は出水の小川からずーっと白雲神社までの一帯を縄張りにして、その中で威張っていました。子供同士のトラブルもありましたが、面白いですね。今、我々がアオバズクをやっている宗像神社は縄張りではなかったもので、こんな神社があるということは後に知りました。

思い出と言えば、今も続けているアオバズクの食べ残しの調査です。これは本当にすごいです。13年間のうち2012年だけ繁殖しなかったもので、本当はもう14年目です。2012年には何かトラブルがあったようで、西台先生は「カラスやタカに襲われたのだろう」と言っていました。ネコが巣まで登ることはないと思いますが、アライグマは鴨川にいるので御苑にもいるかもしれませんし、猛禽類もいます。台風が多かったとか、環境の変化ももちろんあると思います。温暖化もあるかもしれません。その結論を出したいのですが、難しいです。確かに言えることは、今年は小さなコガネムシをたくさん食べているということです。なぜ小さい虫ばかりを食べているのかと西台先生と話していました。南に渡る前に最も多く食べられているものはセミです。これはダイエット食だと思います。あ

まり良いものばかりを食べていては、長距離を飛べない訳です。そういうことも調査から分かります。カブトムシが多い時期もありますが、なぜかと言うと、御苑の各所に散布されているチップの中に、カブトムシの幼虫か卵と一緒に入っているからだと思います。中には全然いないという年もありますが、これはアオバズクかネコが食べたのではないかなと思います。トンボなんかは黄昏時に獲るのだと思います。このように考えることは非常に難しいことですが、面白いです。それから、オオシロカミキリという小さくて綺麗な白いカミキリムシが御苑にいます。このことを昆虫学会で報告したとき、カミキリを採集している人が「未だにオオシロカミキリの成虫を見たことがない」と言っていました。非常に珍しいカミキリムシで、やはりアオバズクの食べ残しから見つかりました。このカミキリは、夜にはムクノキ、ケヤキの枯木の上にいます。もう少し観察しながら考えていけば、いろいろなこと、ものすごいことが分かります。

自然教室を通じて勉強することも非常に多いです。参加者からいろいろな質問がありますし、お年寄りの方や子どもの反応もみんな違います。今度の秋の自然教室では、アオバズクの食べ残しの標本を見せてお話ししようと思っていますが、どんな反応が返ってくるのか楽しみです。

**京都御苑で好きな場所、
好きな時期などありますか？**

京都御苑はかなり人工的に造られた庭園ですが、「母と子の森」の辺りは設計図がないと思います。あそこは、雑木林のようなものです。何代目かは忘れてしまいましたが、

いつかの京都御苑管理事務所の所長がちらっと「これは雑木林である」とおっしゃっていました。中西甚五郎さん（京都御苑管理事務所 庭園科長）も知っていると思います。私はそういう場所が好きです。ぐちゃぐちゃといっぱい草木が生えているような場所があると、昆虫とかは非常に面白いです。アオバズクが数ヶ所営巣していますが、それも大体そういう場所です。また、紫宸殿の上に北山がバーンと見える広い場所も立派だと思います。それから、黒木の梅は何代も代わっていると思いますが、あしらいがすごいと思います。黒木の梅には野鳥もチョウも来るので面白くて、今年は何か新しい生き物が来ないかなと思いながら見に行きます。私が京都御苑で1番好きな場所は、昔、出水広場の小山の西側にあった細い通路です。道ではありませんが、ずーっと通れました。そこへ行くと、非常に巨大なクワカミキリが出たりして面白かったのです。そこに座っていると、昔ヘルマン・ヘッセが言ったような子供なりに考えることができるような閉鎖的な場所でした。しかし、今は変な人が来てしまうからという理由でどこの公園も茂みをつくりません。人間社会に少し問題があると茂みや小道がなくなります。やはり少し惜しいと思います。

**京都御苑の今後について、
御意見などございましたら
自由にお聞かせください。**

京都御苑の将来を考える時のキーワードは、小道です。小道が茂みに囲われていれば本当良いですし、昆虫や野鳥の好むような木が植栽されると良いとも思います。アオバズクの食べ残しを考えた場合にも、環境が多様

である方が良いと思います。御苑にはその多様性があるので良いと思います。ドイツの街の真ん中に、ものすごく立派な公園があるそうですが、我々から言えば「いや、ここには御苑がある」と言えます。その御苑をいかに大切にするか、ということだと思います。昔の御苑には、食べ物屋さんなどはありませんでした。昆虫採集をする子どもにも、御苑を巡視している人はなかなか厳しかったです。トンボ釣りといって、小石に糸をかけて空中にビャーッと投げてトンボを捕まえるのですが、マツの木にはたくさんのテグスがぶら下がっている訳です。我々は見張りを立てておいて、「来た！」と警察官がやってきたことを誰かが知らせると、バァーッと四方へ散って逃げていました。昔はもちろん芝生の中には入れなかったので、そこへ侵入して昆虫を探すのも楽しかったです。

将来、日本の公園、都市の公園はどうなるのか私にもよく分かりませんが、京都の自然は非常に優れていて、「山城の国」と言うように山に囲まれ、その中に点在する緑地も非常に多く、それらが川などで繋がっています。昔、琵琶湖疎水が御苑に入っていた頃は、もっといろいろな琵琶湖の昆虫などが来ていたと思います。東山や北山は生き物の宝庫のような場所です。それに囲まれているので、本当に良い場所だと思いますし、1番良いことは鴨川と高野川が合流する場所のすぐ近くに御苑があるということです。2つの川の上流から生き物がやって来ます。京都御苑の航空写真を見ると、やはり緑が豊かだと思います。こんな場所は、普通ありません。

塚本珪一さまプロフィール 京都市生まれ。京都府立農林専門学校卒業後、平安学園教諭、北海学園北見大学教授、平安女学院大学教授などを歴任。フンころがしの調査研究を行う他、カラコルムやコンゲール等の登山隊に参加。現在は京都自然観察学習会や日本山岳会に所属するなど、自然指導に尽力。著書に『日本糞虫記 フン虫からみた列島の自然』（青土社）、『ふんコロ昆虫記』（トンボ出版)など多数。

2017年10月5日 インタビュー

聞き手：田村省二，積田真希子